

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～「記・理・判」から「創・指・決」の時代へ？～

よくこの通心（信）で取り上げている『致知』という月刊誌（店頭販売はしていません）に、明海大学名誉教授の杉山徹宗（すぎやま かつみ）先生の以下のような意見が掲載されていました。
では・・・どうぞ。

明治の日本は、欧米諸国に学び追いつくために、「記憶力・理解力・判断力」（「記・理・判」）に優れた人材、ペーパーテストで100点を取るような人材を積極的に政府や役所に登用していった。

また、明治新政府は、国家の政治制度を当時世界の最強国家であったイギリスをまねて、「議会制民主主義」に決定した。

この制度は、簡単に言えば、国家試験に合格した各省庁の役人たちが、省庁に必要な法案や政策を練った上で議会にあげ、そのあがってきた「案」を、国民から選ばれた国会議員たちが議論して決定していく制度である。

その結果、日本の政治・経済・社会・科学などの政策の「立案と運営」は官僚に委ねられることとなった。この伝統が明治以降も続き、日本ではテストで100点を取り続ける「記・理・判」人間が高く評価され、要職に就く社会になってしまった。

しかし、テストで100点を取り続ける『「記・理・判」人間』には、残念ながら独創力や指導力、決断力が不足している傾向がある。むしろ100点を取ることで威張ってふんぞり返る傾向が強い。

一方、ペーパーテストで100点が取れなくても、大学などを卒業していなくても、国家1種試験に合格できなくても、現場リーダー、経営者として日々重要な決断を行ったり、新しいアイデアで貴重な改善や発明をしている人材はたくさんいる。

要するに100点だけを取る者を優秀者、指導者とするのは間違っているのではないか。むしろ、90点であっても、「創造力、指導力、決断力」を有する「創・指・決」パワーに溢れた者が、日本社会を引っ張っていく人間だと思う。

今後日本が発展していくためには、『「記・理・判」人間』よりも『「創・指・決」人間』をいかに育み、社会で高く評価し、登用・活用していくかが、重要であると考えている。

『致知』3月号 連載 意見・判断「超大国日本を以下に実現するか」より

もちろん、「記憶力・理解力・判断力」の土台がないと・・・「創造力、指導力、決断力」も育たないと思います。高校生の君たちは、今、土台となる「記・理・判」の力をしっかり身につけながら、「創・指・決」の力を身につけるきっかけをこの県高での学習・授業・学校行事・探究活動・部活動・HR活動・委員会活動・・・などで得て欲しいと思います。

何でも「アメリカでは・・・だから」とは思いませんが、アメリカの政府や企業は、学校を卒業したばかりの学生はまず採用しない。学校を卒業した後、社会に出て二・三年、様々な困難な体験と潜り抜ける努力、即ち、「創・指・決」パワーを養ってきた人（社会でアルバイトやボランティア活動、海外体験・・・などなど）を積極的に採用するそうです。

これからの「VUCAの時代」（変動性（Volatility）、不確実性（Uncertainty）、複雑性（Complexity）、曖昧性（Ambiguity）の4つの要素が特徴の現代社会）で活躍し、社会に貢献する人になるために、限られた高校生活の時間、「記・理・判」の力とともに、「創・指・決」の力も身につけるために、様々な困難な体験をするとともに、潜り抜ける努力も経験して欲しいと思います。

ただし、いつも言っているように、本当に困った時は、私たち大人に相談してくださいね。

